

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

振り返ると、幼稚園、保育所、児童福祉施設などの五回にわたる実習 力を合わせて取り組んだ「山緑祭」、こども動物自然公園での「動物飼育体験」、ホスピタリティを学んだ「ディズニールランド体験」、石坂の森での「里山保全体験」、そして生き生きとした躍動感あふれるパフォーマンスを見せた「クリスマス会」での創作劇「おもちゃの国と思い出のパズル」

春の若葉・夏の新緑・秋のどんぐり・冬の雪景、四季折々の美しくやさしさあふれるキャンパスで学んだ二年間でした。

本日は、学校法人山村学園から岡理事長 山村

寛前理事長 山口・藤野両理事、山村正巳(まさき)本部長、の各皆様にご臨席をいただいております。

さて、平成二十三年の三月十一日午後二時四十六分十八秒、丁度、本学の卒業証書授与式終了後、東日本大震災が発生しました。今でも鮮明に記憶に残っておりますが、式が終わり、川越で開催される午後の卒業パーティに向けて車を走らせ、皆さんが飼育体験した「こども動物自然公園」の信号機に差し掛かった時、車が突然横揺れました。これはいつもの地震とは違う、早速、短大に引き返すと、各研究室の本棚が倒れ、図書館の天井からは水が噴き出し多数の書籍が水浸しになっていました。東武東上線はストップ、私を含め五、六人の先生方はその夜、短大に泊まることを余儀なくされました。もちろん卒業パーティは中止、テレビの映像では津波が押し寄せ、車や家が押し流される想像を絶する光景がひっきりなしに飛び込んできました。あれから九年。

今はパンデミックとなったコロナウイルスの感染で中止となった卒業式がたくさんある中、保護者の方々は残念ながら参加できませんが、こうして皆さんとともに卒業証書授与式ができることは、本学はもちろんのこと、私にとっても本当に本当にうれしく思っております。

今日は卒業にあたり、「セミ」のお話をいたします。

夏の風物詩「セミの一生」とは
「ミンミンミン」という鳴き声を聞くと「夏が来たなあ」と思います。

セミの一生は不完全変態、蛹の時代がありません。

まずは樹木に産卵。翌年の梅雨の時期にふ化、そして土を目指して木を降りる。土の中で三年から長いもので十七年間（アブラゼミは六年間）木の根から樹液を吸って脱皮を繰り返し成長します。やがて地上に這い出て木を登り羽化。

鳴く時間は種類によって異なり、しかもオスだけ

カナカナカナと鳴く「ヒグラシ」は夕暮れ時

「アブラゼミ」はジリジリジリと油の煮えたぎるような声を出します。また「ツクツクボウシ」の鳴く声を聴くよ

うになるともう夏の終わり

セミにとつては土の中こそパラダイス

「地上で一週間だけのはかない命」「出てきてすぐに死んでしまうなんて、かわいそう」と思うのは人間のエゴ。当のセミにとつては長い間の土の中こそパラダイスと言えるかもしれない。木に産み付けられた卵から一〜二ミリの幼虫が出て、地面の土に潜るまでの間は、最も外敵に狙われやすい一生で最大の難関といえます。一方、土の中はほとんど外敵がいないのです。

スコールのような雨と猛暑を繰り返す昨今の夏。心なしかアブラゼミの鳴き声も「アチーチ アチ」と聞こえてしまふのは私だけではないと思われれます。生物季節観測の対象動植物である「ヒグラシ」も地球温暖化の影響か鳴き声が聞こえなくなったとして観測を休止した都道府県も出てきています。近年「周期ゼミ」といって十三年、または十七年という周期で地域ごとに一斉に羽化するゼミも話題となっています。

セミの鳴き声とともに環境問題、特に地球温暖化による「気候変動」と関連付けて考えてみる良い機会かもしれません。

保護者の皆様へ一言ご挨拶を申し上げます。ご卒業、本当におめでとうございます。

「卒業」、それは新たな道への旅立ちであり、希望に満ち溢れたときであります。しかし、それは同時に、親しい友との別れのときであり、おそらくは終生心に残るであろう人生の節目のときでもあります。保育を取り巻く状況として、少子化、待機児童、虐待等の諸問題のある世間の荒波に、立ち向かうときでもあります。道を間違わないよう、もうしばらく温かく見守ってあげてください。

卒業生の皆さん、皆さんは記念すべき令和最初の卒業生となります。「さいたま景観賞」を受賞した、緑あふれるこのキャンパスを愛し、この学園に学んで良かったと思える学園生活、本短大の校歌にも歌われている「友よ やまむら」にあるように、人生にとつてかけがえのない友をつくることができたこと、そして東日本大震災やコロナウイルス発生のように何が起るかわからない不透明な時代、皆さんは平成、令和へ、さらにその次の時代へと心を繋いで一層強くたくましく生きていってほしいと願っています。

四季折々に美しい花を咲かせる自然豊かな本学、就職先や人生に行き詰ったときは、いつでも「ただいま」と言っ

て来校するのを待っていることを約束して、式辞といたします。

令和二年三月十七日

学校法人 山村学園短期大学 学長 野口 一夫